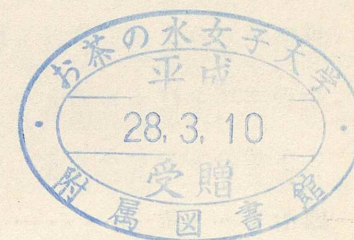


一般教育総合コース

ものをみる眼(Ⅰ)

1966年度



お茶の水女子大学

目 次

はじめに：

一般教育における総合コース	井上 茂	1 頁
「ものをみる眼」序説	井上 茂	5 頁
才一 必理学からみたものをみる眼	波多野完治	8 頁
才二 化学的に自然をみる	内海誓一郎	9 頁
才三 生活現象をみる眼－自然科学の立場から－	矢部章彦	12 頁
才四 日本人の目－古典文学を通して－	堤 精二	13 頁
才五 哲学からみたものをみる眼	藤田健治	14 頁
才六 生理学におけるものをみる眼	荒木忠雄	16 頁
才七 化学者のものをみる眼	林 太郎	17 頁
才八 政治をみる眼	蠟山政道	18 頁
才九 歴史のみかたと、歴史学から導かれるもののみかた	尾鍋輝彦	19 頁
才十 表現の問題	龜谷俊司	20 頁
才十一 小児医学の面から	平井信義	21 頁
才十二 歴史的なもののみかた	市古宙三	23 頁
総合コース聴講の学生諸君へ	内海誓一郎	24 頁
講義日程		26 頁

はじめに：

一般教育における総合コース

井 上 茂

総合コースが本学でおこなわれはじめてから10年になる。この間、毎年ちがつたテーマに多数の教授と学生とでとりくんできた。それは、本学のみならず、今日の大学教育における最も重要な課題にたちむかった勇気ある実験であった。そして、今日では日本の諸大学から注目されている本学の特色の一つとなっている。

一般教育は、新制大学の特徴であるとともに、最大の難点となっている。これをどう具体的に実施するかは、今日の大学における教育・研究・行政を通じての核心的問題である。一般教育は「新制大学」の理念の要素をなすものであり、それだけに、今日の大学への評価とくに批判は、一般教育の現実のあり方に集中している観がある。このことは、大学教育に直接関係しているものが、ひとしく最も切実に体験し反省し苦闘している教育問題であり社会問題である。

そこで、われわれは、「大学」というものを内側から観察するとともに外側からも観なおすことをもとめられる。大学の使命と運命とを、これら二つの視点から新しい感覚をもって考察する必要がある。考えてみれば、今日なお「新制」大学というのはおかしいのであって、われわれは、むしろ「現代の大学」として、われわれが学問をしているこの大学のあり方を検討すべきであろう。そして、現代の大学という視点からみると、一律で特色がなくなったと一般にいわれている新制大学としての諸大学について、さまざまな事実上の特徴が際立ってくるように思われる。その最も重要な特徴は、一般教育と専門課程との関係、そのつながり、そのかみあい、どう有機的・組織的に、かつ学

問的におこなわれているかにかかっているといえよう。ところで、さいわいに、われわれの大学は、現代の大学としては重要かつ貴重な特殊性を保持している。本学は、質的には真に学問を愛し研究心にとんでいる学生にみちており、量的にはいわゆるマスプロ教育からはほど遠い教室のあり方であり、なによりも、学生数と教授数との割合がまず理想的である。一般教育についていえば、本学では、一般教育担当と専門課程担当の教授を区別していないので、全教授が一般教育にあたることが可能であり、事実おこなわれている。また、一般教育の科目および時間については、いたずらに量の問題にこだわらず、むしろ科目の整理と講義の内容・効率に重点をおいてきた。これらの従来の方針と実践とは、大学の組織・構成に変化のないかぎりつづくであろうし、本学の貴重な特殊性がそれだけつよく推進されて、わが大学の教育と学生生活とに豊かに生かされなければならないであろう。

総合コースは、今日の大学における一般教育のあり方についての経験と問題意識から発して、わが大学の特徴を生かすことにより、現代の大学に要請されている課題にこたえようとするものである。この総合コースは、過去10年にわたる学生と教授との双方の経験を批判的建設的に生かし、反省を重ねて今日にいたっているが、まだまだ検討の余地は多い。今年もまた総合コースはこれでよいかを問わねばならない。教授も学生も、講義の過程において、つねに、これでよいかを意識的に問題とし、それを、セミナーにおいて、あるいは設けられている質問箱への投書を通じて、批判・評価・討論・反省を現実に生かしていくことになる。このようにして、総合コースは、教授と学生とがつくりあげていく新しい型の一般教育科目に成長していくことができるであろう。

総合コースは、一般教育における特徴ある科目であるとともに、それはま

た専門課程にとっても特徴のある一般教育科目でなければならない。この観点から、今年はとくに、総合コースの性質と機能とを、あらためて考えてみた。従来、一般教育の重視と強調は、ただ「一般教育」として独自になされてきた傾向がある。他方、一般教育は、専門課程を量的に制約するものとして批判されがちである。そこで、専門教育と一般教育とが対立的に考えられ、専門課程のための基礎教育と一般教育とが対峙の関係におかれるようなことになる。そうすると、本来調和的であり、むしろ相補的な関係にあるはずの両者が、現実には対立はおろか相殺（そうさい）の関係になってしまう。そこで、これを調和と相補の有機的な関連性をそなえた一貫的な教育過程とする必要が、当然のことながら、あらためて具体的に工夫されなければならない。

このためには、専門課程と一般教育との媒体を設定し、両者をむりなくつなぐことがもとめられる。それが総合コースである、と安易にいうのではない。問題は、このような要請に応じ得る総合コースの内容である。上述の要請にこたえることは、個々の一般教育科目においても地道にそれぞれおこなわれていることであろう。総合コースの内容もそうでありたいのであり、総合コースのばあいとはとくに、この要請により広く（それだけ浅いということとは自覚し反省しなければならないであろうが）こたえ得る科目であろう。それは、専門課程と一般教育との間の単なる架橋にとどまるものでなく、両者間の溝を埋めて、一般教育から専門課程へ（また必要あればいつでも後者から前者へ）たんとと歩める道をつくることでなければならない。これは、きわめて具体的な、現代の大学が当面しているしごとである。それは、現代の大学人が、まず行[・]う[・]べ[・]き[・]し[・]ごとであり、また、で[・]き[・]る[・]し[・]ごとである。

今日の大学が直面している一般教育と専門課程との上述のディレンマ（本

来一体のものであるはずの両者が現実には対立的であるという)は、「新制」大学が真に「現代の大学」に脱皮するためには、なんとしても解消しなければならないのであり、これがいかに難関であっても、われわれは堅実で継続的な努力によって発展的に切りひらいていかなければならない。

このような問題意識から、本年度の総合コースのテーマは、とくに、現代の大学における専門課程と一般教育との接点ともいべき問題に焦点をおいておこなうことになった。

学生諸君は、講義を通じて、大学においていかなる学問がおこなわれ、それが相互にいかなる関連にあり、直接にせよ、間接にせよ、社会と人間とにいかなる関係をもっているかなどについての理解を、自主的に問題意識をもって堅実に増進してほしい。それは、自己における、あるいは社会における、なにを保持し、なにを変革するかについての思考と行動との前に、前提条件として体得していなければならない理解力と判断力とを謙虚に地道に自ら育成する途である。諸君は、この一連の講義において、さまざまなものをみる眼、ものの見方、思考のしかた、表現のしかた、把握のしかた、分析のしかた、などのあることを知るであろう。そして、それをじぶん個人の経験と勉強とにおいて活用してみることができよう。さらには講義中での質問として、あるいはセミナーでの質問や討議として(友人相互の雑談においても)理論と現実との合致・不合致についての体験を、具体的に提示して教授や友人との間で思考法・観察・分析方法などの交流を効果的におこなうことができよう。そのことは、諸君の認識力と判断力とを鍛練することになり、学問の世界と複雑な現代社会とに、ともにつよく生きていく素地をつくっていくことになる。

「必要なのは、科学というその一分科にも容易に通曉し難い具体的な学問なのであって科学的な考え方というような伝染病の如き通念ではない」

小林秀雄「私の人生観」より

○ 「ものをみる眼」序説

井 上 茂

○ 学問の前進の基礎条件

○ 学問の対象と性質

○ さまざまな視点・視角

——マクロとミクロ、静態と動態、内面と外面、具象と抽象、構造と機能、過程と体系、二元論と一元論、分析道具・伝達道具と対象、分析と構成、

(参考書)

- | | | |
|------------------|-----------------|-----------|
| ○ 笠 信太郎 | 「ものの見方について」改訂新版 | 南 窓 社 |
| ○ 伊 藤 整 | 「求道者と認識者」 | 新 潮 社 |
| ○ 島 崎 敏 樹 | 「心で見える世界」 | 岩波新書 |
| ○ 岸 本 英 夫 | 「死を見つめる心」 | 講 談 社 |
| ○ 高 見 順 | 「死の淵より」 | 講 談 社 |
| ○ 小 林 秀 雄 | 「私の人生観」 | 新潮社 全集才7巻 |
| ○ 九 鬼 周 造 | 「<いき>の構造」 | 岩波書店 |
| ○ 荒 垣 秀 雄 | 「自然—天声人語・才時記」 | 朝日新聞社 |
| ○ 高 橋 義 孝 | 「近代芸術観の成立」 | 新 潮 社 |
| ○ 柳 田 国 男 | 対 話 集 | 筑 摩 叢 書 |
| ○ 小 林 秀 雄 | 対 談 集 | 講 談 社 |
| ○ 中 村 雄二郎 | 対話「日本文化の焦点と盲点」 | 河 出 書 房 |
| ○ C. H. ウォーディントン | 「生命の本質」 | 岩 波 書 店 |
| ○ 山 内 恭 彦 編 | 「人間と機械」 | 岩 波 書 店 |

- G.P.トムソン 「科学のインスピレーション」 ダイアモンド社
- 湯川 秀 樹 「科学的思索における直観と抽象」科学 1964.Nov
- J.G. ケメニー 「数学における厳密性対直観」数学セミナー 1964. Oct. Nov
- 龜谷 俊 司 「数学と論理」 数学セミナー, 1964. Oct. ~ Dec.
- 都城 秋 穂 「地球科学の歴史と現状」 自然 1965.10 ~ 連載中
- ロゲルギスト 「物理学の散歩道」正統 岩波書店
- W.ハイゼンベルク 「現代物理学の自然像」 みすず書房
- W.ハイゼンベルク 「現代物理学の思想」 みすず書房
- 山内 恭 彦 「物理的世界像」 日本, 昭和39年12月号
- 沢 潟 久 敬 「医学の哲学」 誠信書房
- 赤 座 憲 久 「目の見えぬ子ら」 岩波新書
- 波多野 完 治 「子どものものの考え方」 岩波新書
- 山内 恭 彦 「人間は機械か」 朝日新聞 昭和40年 12. ~ 23
- 宮 沢 俊 義 「人間の価値」 朝日新聞 40.8.22 ~ 9.3

(以上・朝日新聞縮刷版をみよ)

- A.J.エイヤー 「言語・真理・論理」 岩波書店
- 沢 田 允 茂 「現代論理学入門」 岩波新書
- 和 辻 哲 郎 「風 土」 岩波書店
- 中 村 元 「東洋人の思惟方法」 みすず書房・春秋社
- 飯 塚 浩 二 「東洋への視角と西洋への視角」 岩波書店
- 丸 山 真 男 「日本の思想」 岩波新書
- 丸山・梅本・佐藤 「現代日本の革新思想」 河出書房
- 蠟 山 政 道 「新日本のビジョン」 朝日新聞社
- 尾 高 朝 雄 「自由論」 勁草書房
- シュンペーター 「経済分析の歴史」 1-5 巻 岩波書店

- M.ヴェーバー 「社会科学方法論」 岩波文庫
- M.ヴェーバー 「政治・社会論集」 河出書房
- 堀 米 庸 三 「歴史をみる眼」 NHKブックス
- 安 藤 良 雄 「昭和経済史への証言」 毎日新聞社
- 渡 辺 洋 三 「法というものの考え方」 岩波新書
- 尾 高 朝 雄 「法の窮極に在るもの」有斐閣
- 井 上 茂 「現代法思想の論理分析」「現代基礎法学の方法：法哲学」(岩波講座・現代法第13巻、第15巻)
- 「現代分析法理学—その哲学的基礎」(「現代法哲学の諸傾向」有斐閣)

○ オ一 心理学から見たものをみる眼

波多野 完 治

- オ一回 1. 1. この問題に対する心理学的
アプローチ 心理学と論理等
1. 2. 発生的認識論
1. 2. 1 知覚の体制
1. 2. 2 思考の可逆性
1. 2. 3 自己中心性から客観性へ
1. 2. 4 日本人のもののみかた
- オ二回 2. 1 視聴覚的認識論（映像的認識論）
2. 1. 2 映像の二つの意味、内的映像と外的映像
2. 1. 3 映像の進化（写真からテレビへ）
2. 1. 3 映像の心理学的特性（映像は人を受身にするか）
2. 1. 4 映像を利用するもののみかた

〔 参考書 〕

波多野 完 治 子どものものの考え方 岩波新書 150円

ピア ジ エ（波多野 註） 知能の心理学 みすず文庫 280円

花 田 清 輝 新編映画的思考 未来社 580円

多 田 道太郎 複製芸術論 勁草書房 600円

○ オ二 化学的に自然をみる

内 海 誓 一 郎

- 自然は人間の感覚器官を通して人間に受容される
- なまの感覚で受容された表象は、ほとんど時空の枠もない状態で、しかし無限の発展性と流動性とをもったゆらめく現象としてただよっているようなものである。
- 人間の思惟の能力はこれを多かれ少かれ永続する概念によってつなぎとめる活動をする。
- これは発展と流動を本質とする自然対象に対してはこれを固定し、静止させることを意味するが、人間の主体性から言えば分析、比較、規定などを含む論理的思考活動の開始である。
- またこれは特定の個人が対象を理解する方法であるのみならず、その映像は他人もまた理解することができ、かくして人間の間での思考の伝達が可能となる。
- これに加えるに人間が絶えず新奇なもの、未知なもの、不可解なものを求めてやまない実践力が、自然の映像を作り上げて行く基礎をなすものである。
- 論理的思考活動には記述ということが不可欠である。
- 「書くことこそ考えることである」とさえ言える。そこに他人の理解の可能性が予想されているのである。
- このために、言語、述語、数字、記号、図式などが採用されなければならない。またそれに対応する思考活動は、同定、否定、分類、差別などを通し、主観性がとり除かれ、静的に固定、限定され、選択、整理の結果見たままではなくなり、欠けたところは補われ、ゆがみもなおされるであろう

う。専門化もここからはじまる。

- このようにして自然科学は人間によって創られる。自然はひとつであり、連続的、流動的であるが、ここに築かれる自然科学は常にひとまず静的に体系として固定化される。分科もまた生じる。
- しかし固定化に際して理念が限定した枠は、絶えず実証を通して是認されなければならないし、また懐疑や否定は全く自由であり、自然をみるという実践によつて得られたあらゆる人間的伝達は尊重され、かくして自然科学は限りなく進歩する。それは客体である自然と、主体である人間とが、体系としては相互独立であるにも拘らず、認識においてはひとつであるからである。
- 思考、記述、実証の方法は今日非常な専門化と高度の技術化を径ており、また人間の体験の種類も限りなく増大しており、本来すべての人間に理解可能であるべき自然科学の内容が、ほとんど専門外のものに理解困難になっていることは考えなければならない問題である。それだけに今回の総合コースのテーマのようなことは一般教育と専門教育のつなぎとして各人よく考えなければならないことである。
- 毎日研究にあたっているものにとってはこのような問題は多くの場合見過ごされている。しかし研究者がどうしてある対象に対しなんらかの形で科学的な興味、あるいは研究の魅力をもつに至ったかということは、別に個人的な問題ではなくてもっと人間性にもとづいたものでなければならない。
- これから科学を学ぼうと志ざし、あるいは科学の時代といわれる現代に何らかの専門で身を立てようとする白紙の学生諸君に、このことを理解してもらふことは正しく科学的精神を芽生えさせることであると考え。たとえば、誰々のような偉い科学者になりたいというような個人崇拜的な志の立て方は間違っている。

- 以上は私の序論である。講義では私の専門である化学という自然科学の分科について、自然に内在し、化学を今日の体系にまで発展させた理念の本質と方向について説明してみたい。

○才三 生活現象をみる眼

— 自然科学の立場から —

矢 部 章 彦

ものをみる眼がすべて観察からはじまるとしても、人間の生活に関係深い事象をみる眼は、自然現象をみる眼あるいは社会現象をみる眼とはかなり異っているように思われる。

もちろんいかなる場合でも、ものをみる眼は客体をつめる主体を意識する以前のものとしてとらえられなければならない。

そこにはまた、学問的立場から出発したもののみかたと、学問そのものをみる立場とが渾然一体となったものをみる眼が存在する。

観察・思考・分析の螺旋階段を無限に昇りながら、われわれはたえずものをみつめつづける。

知的世界像のほかに、情・意の世界をみとめること、そしてさらに聖なる世界を信ずることもまた、ものをみる眼の深さにつながるのであろう。

I 序 言

II 私の眼でみた幾つかの生活現象

- a 洗浄作用の理論 — 界面化学とのつながりを軸として —
- b 有機化合物の色と化学構造 — 物質観の変遷を背景として —
- c 消費科学と商品テスト — 民族の生活態度の反映として —

III 結 言

○才四 日本人の目

— 古典文学を通して —

堤 精 二

- (1) 日本文学の素材
- (2) 観察の態度と方法
- (3) 元禄文化の形成

〔 参考書 〕

津 田 左右吉 「文学に現われたる 我が国民思想の研究」

阿 部 次 郎 「徳川時代の芸術と社会」

○才五 哲学から見たものをみる眼

藤 田 健 治

1. 既知体験の基盤と未知発見の活動－同様のものは同様にして知られる（類推）－知識教養の基盤と意識の深層－組織化体系化（蒐集・累積・摂取・編成・改造・再編成・解体・新組織）
2. 直観と思考
 - a 経験直観と本質直観（情感的直観・価値直観）
 - b 意味指向（概念）と意味充実（直観・記憶・想像）
3. 認識の種類
 - a 実在的（感性的）認識と観念的（非感性的）認識
 - b 推理的認識
 - c 表現理解
4. 対象の見方把え方－要素と類型－分析と総合
5. 知識の被規定性
 - a 生理的心理的（コンプレックス）－個人的性格
 - b 歴史的社会的（イデオロギー）－民族的時代的性格
6. 知識の諸形式
 - a 支配知（Herrschaftswissen od Leistungswissen）
 - b 教養知（Bildungswissen）
 - c 解脱知（Erlösungswissen）
7. 人間観・世界観の類型
 - a 人間観－生命・精神・実存
 - b 世界観－自然主義的・歴史主義的

〔参考書〕

Edmund Husserl Ideen zu einer reinen Phänomologie und
Phänomenologischen Philosophie（純粹現象学考案 池上鎌造訳
岩波文庫）

Wilhelm Dilthey, Der Aufbau der geschichtlichen Welt
in der Geisteswissenschaften（精神科学における歴史的世界の
構造）

Nicolai Hartmann, Grundzüge einer Metaphysik der
Erkenntnis；（認識の形而上学綱要） Zur grundlegung
der Ontologie（存在論の基礎論）

Eduard Spranger, Lebensformen（生の形式）

Max Scheler, Die Wissensformen und die Gesellschaft（知認
の形式と社会） 藤田健治 歴史的世界と人間存在 理想社刊

○才六 生物学におけるものをみる眼

— 観察・思考・分析 —

荒 木 忠 雄

1 序 論

- 1) Goethe と Schiller
- 2) Aristotle と Heraklit
- 3) Occam's Razor

2 模型と分析

- 1) 模型による説明の限界
- 2) 分析に対する批難

3 生命の次元

- 1) 生体の空間的階層構造
- 2) 情報の伝達

〔 参考書 〕

- | | |
|------------|-------------------|
| クロード・ベルナール | 実験医学序説（創元文庫・岩波文庫） |
| ベルタランフィ | 生命—生体論の考察（みすず書房） |

○才七 化学者のものをみる眼

林 太 郎

自然科学の一分科である化学では、物質構成の一次基本粒子である分子に対し他の科学とはかなりちがった強い関心が示され、その構造に関しては過去100年間にすぐれた化学者の努力により驚くべき高度の知見を得たが、その発展の経過をたどってみると、それは他の自然科学諸分科のそれとくらべて、かなり特徴のあるものである。パストゥル、ファントホフ、フィッシャーらの業績と最近の内外の研究を通して、化学者の「ものをみる眼」の特質につき考察してみたい。

○才八 政治をみる眼

蠟 山 政 道

1. 予 言 と 占 い
2. イデオロギーとビジョン
3. 科学的知識と総合的判断

参 考 書

Lindsay Rogers, Political Crystal Gazing, 1955

Graham Wallas, Social Judgement, 1934

蠟山政道、新日本のビジョン、1965

○才九 歴史のみかたと、

歴史学から導かれるもののみかた

尾 鍋 輝 彦

1. 歴史のみかた
 - イ 発展と進歩のちがい
 - ロ 構造的みかた
 - ハ 人物の役割
 - ニ 必然と偶然
2. 歴史学から導かれるもののみかた
 - イ お茶の水女子大学は創立17年か創立91年か(断絶と連続の問題)
 - ロ 共同体における執行部は会議(議会)の決定のみを実施すべきか、それ以上のことを実施してよいのか(絶対制、革命期、近代国家における差異)
 - ハ アナロジーを利用するときに注意すべきこと。

参 考 書

トインビー著、蠟山・阿部訳、歴史の研究

堀米庸三、歴史を見る眼 (NHKブック)

日本思想史研究会編、日本における歴史思想の展開

○才十 表現の問題

龜 谷 俊 司

“もの”を考えるにあたって、これらの“もの”を、われわれは言葉なり、もっと一般に記号なりに表わしておく、この表わすということの意義を数学者の眼を通して紹介してみたい。

はじめに基本的ないくつかの概念を説明しておく、たとえば、元素、集会、論理、写像、関係、同値律、構造をもった集合、その表現、表現の場といったものについて簡単な例による解説を試みる。

“表現の場”としての言語や数学の性格とそれらの限界についても触れてみたい。

参 考 者 ポアソナレ 著 科学と方法
 吉 田 洋 一 訳

数学事典（岩波）

雑法“数理科学” 5月号1966、“表わす”L:S:e

岩 波 全 書 初集解析学 1

G. BivKhoff Lottice Theuy

谷 崎 潤一郎 著 文 章 読 本

○才十一 小児医学の面から

平 井 信 義

1. 国際小児科学会（1965年）の3本の柱とその意味。

① 出生前・周産期小児医学（Prenatal and Perinatal Pediatrics）

② 予防接種（Vaccination）

③ 精神衛生（Mental Health）

2. 研 究 方 法

① 回顧的方法（Retrospective Method）

② 横断的方法（Cross-sectional Method）

③ 縦断的方法（Longitudinal Method）

④ 双生児研究法（Co twins Method）

⑤ そ の 他

3. 正常な子ども（Normal child）

① 身体発育論

② 精神発達論

③ 体質論・精神病質論

④ そ の 他

4. 遺伝と環境に関する諸問題

① 染色体に関する研究（Down 症状群をめぐって）

② 遺伝負荷の配列（仮説）

③ 胎内環境の意義

④ 生後1～2カ月の環境の意義

⑤ 乳幼児期の意義

⑥ そ の 他

4. 精神と身体の関係

① 精神身体医学 (Psychosomatic Medicine)

② 身体欠陥児の性格

5. 総 括

○ 才十二 歴史的なもののみかた

市 古 宙 三

"歴史的にものを見る"とはどういうことか。

その長所は？ 短所は？ これらの点を、歴史研究生活を通して得た体験を基として説明する。

○総合コース聴講の学生諸君へ

総合コースの講義形式は他の科目の場合といちじるしく違っているので、聴講の学生諸君ははじめ戸迷いされるであろう。毎年の経験などから考えられる二、三の注意を述べて履修の態度を定める上の参考に供したい。

総合コースの目的については冒頭に井上教授から詳しく述べられているから、ここには形式のことにのみ限定する。

総合コースの特徴は各学部にわたり多数の先生方が、かわるがわる講義を担当され、しかも一つの統一テーマをもっている点にあることは明らかであるが、そのことからすぐに聴講者が予想し易いことは、教官方があらかじめ緊密に打合せて、全体があたかも一つの連続した講義を形成し、黙って聴講していればその年度のテーマについて何かを自然に与えられるであろうという期待である。

ところがその期待がはずれたといって失望の意をもらす学生がいつも何人かあるようである。つまり、各講師の講義がバラバラであって、何が総合かという非難めいた批評である。

実際のところ、事前にお互に講義内容を見せ合って相談や打合わせをするということはほとんど困難であるという事情があることは事実である。したがって、各講師の講義はそれ自身では連続性を欠き、盛りあがりというような効果はないかもしれない。しかしわたくしたちはそのことこそ総合コースの特色であり、単独講師による連続講義とは違っている点であると思っている。

いろいろの違った専門、違った経歴、違った「ものの見方」の先生方が、それぞれ「ものの見方」について述べられるというところに特色がある。つまり、総合をするのは主として聴講者の方なのである。もちろん、総合については、講師の方も大いに協力しなければならない。講義自身は、一つのテーマに

対するものであっても、講師が違えば、領域も、アプローチの方法も、ときには考え方ですら異なり、ときにはお互に矛盾するとさえ思われる場合が起こり得るであろう。そこが総合コースのねらいであり、1人の講師の講義には期待できない点でなければならない。

講師側の総合に対する協力はどのようにしてなされるかといえ、聴講学生諸君の活発な質問や意見開陳に対する解答によってである。

このために、時間中における質問の発言、質問箱の利用、そして何よりもスケジュール中に組み込まれているセミナーの時間が活用されなければならない。そしてこの意味で質問は講義に出てきた事項に関するものであること、そしてできれば質問者の意見や疑問を添えたものであることが望ましい。何人かの先生が一緒に出席されるセミナーの時間に、先生どうしの間で意見の交換があったりすればこれを親しく聞くことは全く他の講義では望めない機会である。

以前に、総合コースはおもしろくないとの意見を洩らしていた学生が、セミナー后には非常に有意義であったと考えを変えた例もたびたびあった。しかしセミナーを価値あるものにするか否かは聴講生の態度に大きく依存している。ふだんからよく講義内容を各自に噛みしめ、批判的に考え、疑問や意見を進んで作っておくのでなければセミナー、そして総合コースは成功しない。2時間ずつの講義を1年間寄せ集めればそれで総合であるというような安易なものではない。ときには、いろいろの先生方に多く接することができて楽しかったなどという意見を提出する学生もあったが、そこをもう少し、大学らしく、知的なものにするよう努力して頂きたいと思う。

(内海 誓一郎)

講義日程

(講義日時＝土曜日から三・四時限 10.20 ～ 12.00)

月	日	担当教官	月	日	担当教官
4	16	井上(序説)	10	22	林
	23	波多野		29	〃
	30	〃	11	5	蠟山
5	7	内海		12	〃
	14	〃		26	尾鍋
	21	矢部	12	3	〃
	28	〃		10	龜谷
6	4	堤		17	〃
	11	〃	1	14	平井
	18	藤田		21	〃
	25	〃	1	28	市古
7	2	セミナー	2	4	〃
9	17	荒木		11	セミナー
	24	〃		18	〃
10	1	セミナー		25	試験

